

## ツナギ

学生の頃は釣りがオートバイに明け暮れていた私。当時オートバイ仲間は釣りをしないので、一緒にツーリングへ行こうと誘われても、気がつけばいつの間にか私は独り山へ、友人は真つ直ぐな道を求めてどこかへ行ってしまう。

ヤマハ RD400と過ごした何度目の北海道だっただろうか。いつもは北海道へ上陸するとすぐにどこかへ行ってしまう友人が、珍しくいつまでも私と行動を共にしていた。

本州から北海道への上陸は当時、東日本カーフェリーを利用。函館へ着くやいなや、二台のオートバイは一路北上を始める。私は良さそうな川を見つければ、いつものようにフライロッドを振る。その傍らで友人は昼寝。私は珍しく魚は釣れ盛り熱くなる。

その日はイブニングまで夢中になって釣りをしたために、テント場を探す時間がなくなってしまった。明日も早くから東の川を目指す予定なので、駅のベンチでシュラフをひいて寝てしまおうと言うことになった。二人はオートバイに括つてあるホコリだらけのシュラフを引っ張り出し、狭いベンチからはみ出さないように上手に床を作っていると、闇の中から小柄な男が現れた。

「おい、そんなところで寝ていたら、風邪ひくぞ。どうした、泊まる場所がないんか？」  
「はあ、テントを張るのが面倒なので。」

「そうか、じゃあワシが公民館のカギを管理しているから、公民館を使わせてやるからそこで寝ろ。」と言って、小走りに去っていた。唐突に現れたものだから冗談だと思いつまふ寝てしまおうかと思うと、しばらくして男は本当に公民館のカギを持って帰ってきた。オジサンは早々私達のシュラフをくるむのを手伝い公民館へ案内してくれた。

その場所は駅から直ぐだったので、バイクで移動す

るといつてもほんの30秒くらい。平屋の木造縦長の建物で、公民館というよりは集会所という雰囲気。多分昼間はご老人がお新香やタクワンを持ち寄って、世間話をしているのだろう。

世の中には親切な人がいるものだ。以前も北海道へ独りで訪れた時に、ちよつと話し込んで仲良くなったオジサンのお宅へ上がり込み、まったく知らない人なお昼をご馳走になったことがあった。

布団を丁寧に引いてくれたオジサンに二人はお礼を言い、疲れていたのですぐに布団へ潜り込ませて頂いた。するとそのオジサンは、

「誰かが来たら困るから、お前らが寝付くまで俺はここで見ているよ。寝たら俺も帰るから。」と、不可解な事を言った。はて、誰か夜中に尋ねてくる？もしかしてオバケでも？ そんな心配よりも長距離のツーリングと釣りの疲れから、頭で考える間もなく、布団のぬくもりを感じながら秒殺で深い眠りについたのだ。

次の朝、そのオジサンは早々と公民館へ訪れていた。友はどうやら寝不足らしく、ふてぶてしい顔をしている。私は一夜の宿のお礼を述べ、魚を釣るために東を目指す話をすると、オジサンは満面の笑みでその場を見送ってくれた。だが、友人は朝起きてからオジサンの顔を見るなりそっぽを向いて、お礼をいう素振りもない。なんて恩知らずなんだ。

朝日を浴びて白煙をあげるヤマハと緑のカワサキは牧草地にひたすら真つ直ぐに伸びる道路を走り続ける。川を求めて次の場所を目指す私にとって相棒はいらない。と言うより、先程の無礼な態度をとる友人がどうしても許せなかった。アスファルトの熱でカゲロウが立つ道の真ん中にバイクを止め、私は友人に突然口喧嘩を始めた。

「お前、あの態度はないだろう。ひどい奴だ。俺についてくるな！好きなところへどこへでも行きやがれ！」

かなりビリビリしていた私は、エンジンを切るなりヘルメット腰にそう怒鳴った。

すると友人は朝見せたふてぶてしい態度のまま話始めたのである。

「バカヤロウ！お前なあ、夕べ何があったから覚えていないだろう、直ぐに寝ちゃったからな。あの後あのオヤジは寝ていたお前のところへ行つて、背後からお前の体触りまくっていたんだぞ。どうやら下半身を触ってパンツを脱がそうとしていたみたいだけれど、脱がせられないで俺のところへ来たんだ。俺は寝たふりでその様子を見ていたものだから、今度は俺だ。ジーパンのチャックを脱がそうとするから、一晩中寝たふりで寝返りをうって、大変だったんだぞ！」

なんと、私は夕べ犯される寸前だったのか。そういうえば確かに着ていたツナギがはだけていた。それにパンツの紐がなぜか固結びになっていた。解けなかったのか、あのオヤジ。その顔を思い出すと急に鳥肌がたつた。

「お前何で叫ばなかったんだ？」  
「だって公民館の貸してくれたから、文句が言えなかったんだよ。」と友人。

当時17〜8歳の私と同い年の彼は髭を生やし、アルバイト先のお客さんに40過ぎの子持ちと思われていた老け顔で、それに襲いかかる小柄のオヤジ。あり得ないシチュエーション、なんてこった。

結局この後言い合いの喧嘩は続き、二人は別の道を辿り一週間後に何事もなかったかのように東京で合つた。

この事件依頼、人の親切に対して疑心暗鬼になってしまった私と友人。この事件の相手が女性であったならばこのお話しをする機会もなかっただろうが、私があの時ツナギを着ていなかったらと考えると、今でも鳥肌が立つてしまう。

オバケ以上に恐いリアルなお話です。